
勇者と魔王の二度目の恋

むう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王の二度目の恋

【Nコード】

N7395W

【作者名】

むう

【あらすじ】

目が覚めたあたしは、美形青年の膝の上にあたまをのせて寝かされていた。

「あ、おはよう。よく眠れた？」

そういつて、あたし顔に唇をよせたとき、あたしは反射的に攻撃を開始していた。

「なにしようとしとるんじゃあああっ！」

そして、あたしの頭突きは見事に美形青年の頭に直撃し、彼はその場でもだえ転がることとなったわけである。

あたし、山田マナは、今流行のいわゆる『異世界トリップ』というものをした。

「あ、おはよう。よく眠れた？」

「……………」

神秘的な海の底のように深い蒼の瞳が、目を開いたばかりのあたしの視界にとびこんだ。

美しい青年だった。

まるで、うでを極めた芸術家の残した作品のように、くるいのないバランスよく顔のパーツが配置されている。

陽の光をうけ、まぶしいぐらいキラキラと輝く金色の髪は、絹糸のようにさらさらとゆれて、くすぐったくあたしの顔に触れたり触れなかったりしている。

(……ちかい)

覚醒したばかりの頭で、ぼんやりとそう考える。

かれの顔はすぐにでもキスができそうなぐらい近い。

どうやらあたしは、彼のひざに頭をのせ、覆い被られるような格好でいるらしい。

「しばらく目が覚めないから心配したんだ。でも、よかった。君が、無事で」

そういつて、熱っぽい視線をそそいだあと、ゆっくりとその顔が近づいていき……。

「なにしようとしとるんじゃあああっ！」
がちんっ！

「……………っ!!??」

あたしは起きあがり、彼の額に自分の頭をいきおい良くぶつけた。石と石がぶつかったような小気味の良い音が鳴る。

上半身を起こした状態になって、いまさつき攻撃を加えたばかりの人物はひたいを抑えてゴロゴロと痛みにのたうちまわっていた。目にちよっぴり涙がたまっている。

「……ふん、乙女の唇を奪おうとするからそうなるのよ」
うでを組み、鼻で息をはく。

そこで、ようやく気がついた。

「って……どこよ、ここ」

気持ちのよい風が、草原の花をゆらして花卉が空中に舞い踊る。

あたり一面には、見たこのないようないろいろな種類の花が咲き乱れる、草原。

見通しはよく、草原の向こうには、どこまでもどこまでも大きく広がる海。しかし、その色は青ではなかった。黒曜石のように美しい、黒。

「なによ……ここ」

自分の記憶には、海が黒い光景なんてない。聞いたこともない。というか、そもそも自分は学校へいく途中だったはず。なのに、どうしてこんな場所にいるのだ。

「それに、今日は龍之介のおにちゃんと約束があったのに……」
龍之介、というのはあたしの6つ上になる人物で、あたしのクラスメイトの兄である。

顔は良いし、クールで不器用ながら優しい。

あたしはその龍之介に片思いをしていた。

せっかくデート（あたしはそう思っている）の約束をとりつけたというのに、こんなところにいる場合ではない。

すっ、と頭の中が冷静になり、そこでようやく状況を説明してくれそうな人物……つまり、先ほどあたしが頭突きを食らわせた人物

に詰問することにした。

「ねえ、あんた！ これは一体どういうこと！？ あたしは今日、学校にいく途中で、しかもデートの約束まであるのにどうしてこんなところにあたしはいるのかしら？」

腰に手をあてて、威圧的にふるまうと、いまだに額に手をあてていた青年は、不思議そうに首をかしげる。

「……？ なにを、はじめて会ったときみたいなこと言っているの？」

「は？ はじめてもなにも、今があんたと初対面じゃない。あたしの知り合いにあんたみたいな、金髪碧眼の外国人さんはいらっしやらないわよ」

「いや、だから……ボクがいるじゃないか。君の知っているひとなら」

「だーかーらっ！ あたしはあんたみたいなひとは知らないって！ あんた、あたまおかしいんじゃないの！？」

いまいちかみ合わない会話に、あたしは苛立ちを覚える。

だが、美形の青年のほうは眉尻をさげて心配そうにあたしにいった。

「本当にどうしたんだよ、マナ」

「どうしたもこうしたも……って、なんであたしの名前知ってるのよ」

彼の答えは、あたしの予想をかなり上回っており、あたしの思考を静止させることとなる。

「え、だってマナはボクの奥さんなんだから当たり前でしょう？」

（……………は？）

いま、なんと？

「えーと……その、いま、なんて……？」

聞き間違いかと思い、もう一度たずねた。そうすると彼はまた、

当たり前のような顔をして。

「だから、マナはボクの奥さんなんだから、知り合いもなにもないでしょうって」

その言葉は、聞き間違いでもなんでもなかったことを思い知るのである。

聞いたあたしの反応は、あたりまえといえは当たり前の反応であった。

まるでマシンガンのように次から次へと、否定の言葉が口から飛び出てきたのである。

「はあ？　ありえない！　なんで！　どうして！？　あたしは、龍之介のお兄ちゃんみたいなクールで不器用優しい男の人が好きなのであって、あんたのほうが美形度は高いかもしれないけど、総合的に言って龍之介お兄ちゃんの足下にも及ばないわよ！　なのに、どうしてあたしがあんななんかの奥さんになっているわけ！？」

初対面の人間にそれだけ物事がはつきりいえるのは、あたしの長所かもしれない。

というか、どんな人間でもタメ口オツケーな性格をしているあたしにとって、この気の弱そうな金髪美形青年はとても心情を伝えやすい雰囲気をもっていた。

（初対面でも、自分の優位を確信できるってどうなんだろう……）
そんなことも思ったが、いまはそんな場合じゃない（ということにしておこう）。

てっきりあたしは、あたしの怒号にビビるのかと思ってはいたが、金髪青年の反応は予想とは違っていた。

顔が真っ青だった。まるで、生まれてはじめて幽霊をみてしまったぐらいに。

「……マナ」

「な……なによ」

ゆらりと金髪青年はたちあがり、あたしに近づく。おもわず後ずさってしまいが、力強く肩を両手でつかまれた。

したを向いていた顔をゆっくりとあげ、彼は非情に難しい難題につぶかったような表情で。

「……君はね、異世界からやってきたんだ。そして――」



「ひゃっははははははははは！ マジで？ マジで、マナちゃん石に頭ぶつけて記憶喪失になってんの！？ しかもその理由が、晩飯の羊追っかけてたからって……っ！」

ハイジの家のようなちいさな小屋。居間と台所と寝室しかないような、こじんまりとした木の家。それがあたしと、金髪青年――ハデスの新婚住居であるらしかった。

ハデスはあたしの隣に座り、居心地悪そうに両手を膝の上にのせている。

イスから転げ落ちてわらっているのは、ユノという青年。

腰に細身の剣を二本刺し、RPGでよく見るような動きやすそうな服装をした、赤銅色の髪と赤い瞳をもった若い青年。

「ひゃはははははは！ しかも返された反応が、であったときと全く一言一句同じだったとか……！ どんだけ変わんねえんだよ！」

ああ、そうか。戻ったって言ったほうがよいのか」

（クロス……こいつ、いつか絶対クロス……っ！）

あたしは顔を真っ赤にして、迎えの席にすわるユノを恨めしい目でみつめていた。

まさか自分がそんな古典的な事態に陥っているなんて……とか、理由があまりにもバカらしくて本当に恥ずかしい。自分がいかにもやりそうなことだから余計に恥ずかしい。

「ああっ！ マナ、そんなに殺意オーラださなくて良いからっ！」

絶対に殺すとか思ってるでしょ！」

「……よくわかったわね」

あわててあたしを抑えに入るハデス。

もうすこしで、机の下からユノのスネでも蹴ってやろうとしていたのだが、見事なタイミングで中断させられた。

あたしの言葉をきくと、どこか遠い目をしたハデスは「……まあ、慣れてるから」。

（あたし、どんだけ世話されてるんだろう……）

そんなこともおもったが、気にしないことにする。

「ねえ、ユノ。マナの記憶を取り戻す方法ないの？　ちよつと……その、ここに来る前までの記憶しかないといろいろと……」

「あー……確かに。来たばかりのマナちゃんって、反抗期のガキみたいにすごかったからなあ。しかも、魔力も持たないのに、魔術師はボッコボコ。賊は身ぐるみを剥がし、金銭を巻き上げる地主には弱みを握り、脅しをかけて事態を解決するだけではなくパトロンにまでする。王様相手に見栄を張ってタンカをきって、見事に言い負かす始末だ。

勇者の聖剣の力を手にいれたときなんて、世界が終わるとおもったね。オレは」

「そのときにはマナも落ち着いて、暴走なんてほとんどなかったら良かったけど……」

そういつて、ふたりはちらりとあたしを見て、それからお互い頷きあつてため息をついた。

「ちよ……ちよつとちよつと！　話を聞いてると、まるであたしが悪魔かなにかみたいじゃない！　さすがのあたしでも、そんな無情なことしないわよ！　……たぶん」

うん、たぶん。

「……一大事だな。笑ってすまん。世界が滅びるかもしれないな」

「……いいんだよ。あの苦労をまたするなんてもう嫌だけど、これも世界のためだものね」

「あたしを置いて、ふたりで納得するのやめてくんない!？　そもそも、なんであたしはこんなところにいるのよ!　家に帰しなさいよ!」

当然のことを訴えると、ふたりはあからさまに視線をあたしから外した。

(まさか……)

「……帰れない、とか?」

揺さぶると本当のことを言いそうな方。つまり、ハデスのほうをむいて訪ねると彼は視線をあちこちに動かし、額にはだらだらと汗を流している。

「ええと……そのう……」

その歯切れの悪い態度に、イラッとしたあたしはやくざよろしく、舌打ちをして腕をくんでハデスを見下して威圧的に問いつめる。

「言いなさいよ。あたし、気は長くないよの」

「……しってる」

というわけで、ときおりユノの補足をいれつつ、ハデスはあたしがどうして異世界に来て、どうなったのかを説明してくれた。

どこぞのRPGのように、この世界には“魔王”が生まれ、魔物が世の中にはびこっていたという。

そこで、古来の伝統にのっとって、魔王にうち勝つために異世界から勇者を呼び出す儀式を行い、その儀式で呼び出されたのがあたし、山田マナ。

で、儀式で呼び出しのが国の神官でもあったハデスで、あたしはハデスを仲間のお供にして旅に出たと。

その先で、いろいろな仲間(ユノとかも、なにかの事情で拾ったとか)と出会い、涙あり、感動あり、恋愛イベントありで、伝説の勇者の剣の力を得たあたしたちは魔王の城までたどりついたという。信じられないことだが、その頃にはすっかり良い雰囲気になっていたらしいあたしと、ハデスは最終決戦前に想いを通じ合わせ、戦いに挑んだとか。

しかしそこには魔王はいなく、戸惑っているとハデスが魔王だと発覚。魔王の邪悪な力に操られる。

そこでなにやら感動のなにかがあり、ハデスの意識を取り戻し、魔王を倒すためにあたしは元の世界に帰られる力さえ持った勇者の剣を粉々に砕いてしまったと。

勇者の呼び出しの儀式は一方通行で帰れないので、勇者の剣がなくなつたあたしは見事に元の世界に帰ることなく、ハデスと共に生きることを誓うのだった。

「つて、納得できるかあああつ！」

「うわあああつ！ ご、ごめんってばーっ！」

「……ホントに、変わってねえなあ」

ちやぶ台返しのように机をひっくり返して、猛反撃を開始する。

ハデスは両手を上にあげて、半泣きで叫んで硬直（本当にこいつが魔王だったのか疑わしい）。

ユノは足と腕をくんで、じみじみと懐かしむ様子をみせている。

「いやいやいや、たとえそうだとしても、それは前のあたしであつて今のあたしではなーいっ！ あたしは今、帰りたいの！」

「絶対そういうと思った……」

「あ？」

ぎろりと睨むと、ささっとハデスは絶好のタイミングで目線を逸らす。

悔しいが、あたしの扱いがわかつてる反応である。

「うぬぬぬ……絶対、絶対に帰ってみせるわよ……っ！」

「あー……なつかしいなあ、この執念。ハデスとラブラブモードになると、そういうのもなくなつてたからマジでなついわ」

「勘弁してえ……」

ハデスは半泣きでガックリと肩を落とした。

というか、こんな反応をされるあたしは、彼らになにをしていた

のだろうと思ってしまう。

……………。

考えたが、面倒になってやめた。

「とにかく、帰る方法を探しなさいよ！ 出かけるわよ」

「って、え？ 今から!？」

「当たり前じゃない！ あたしは今、帰りたいんだから。あんたは水が飲みたくて仕方がないなら、井戸にいくでしょ？ 台所に行くでしょ？ ただイスに座ってたって、誰も水なんて持って来てはくれないわよ」

『何事もまずは行動』。

それがあたしの教訓である。

胸をはってそう伝えると、どうしてかハデスもユノも、諦めたようであり、どこかホッとしているような穏やかな表情になった。

「……ま。またマナちゃんと旅できるならそれも良いか。どうせヒマだしな」

「そうだね。マナは、マナなんだから」

「うわ、なま暖かい目で見えるな！ 気持ち悪いっ！」

「まあまあ、良いじゃないか。だけどよ……がんばれよ、ハデス」
「……うん」

受け入れつつも、困ったように笑うハデスと、年上の兄のようにハデスの背中を叩くユノ。

「どうやら、ハデスは応援されているらしい。」

「……あたしとの、恋を。」

あたしは咳払いひとつして、くるりと背をむけて歩き始める。

「あ、待ってったら。準備だってあるんだし」

「……うるさい、黙れ、キモイ！」

「最後のはわからないけど、酷い……」

抗議の声を無視して、あたしは力強く歩く。

認めない。

絶対、絶対、絶対に、認めない。

あたしには好きなひとがいるんだから。

い。こんなやつと結婚とか、元の世界に戻れないとか、絶対に認めない。

決意を胸に秘め、あたしは異世界を旅することになったのであった。

(後書き)

異世界トリップが流行ってるので、流行にのってみました。

よろしければ、感想よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7395w/>

勇者と魔王の二度目の恋

2011年9月16日22時26分発行